

大齋節第一主日（2月18日の聖書箇所）

I 第一朗読（創世記9章8―17節）

8 神はノアと彼の息子たちに言われた。9 「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。11 わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こつて地を滅ぼすことも決してない。」12 更に神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。13 すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。14 わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、15 わたしは、わたしとななたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となつて、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。16 雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」17 神はノアに言われた。「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

II 第二朗読（ペトロの手紙1の3章18―22節）

18 キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しめたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。19 そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行つて宣教されました。20 この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待つておられたのに従わなかった者です。この箱舟に乗り込んだ数人、すなわち八人だけが水の中を通つて救われました。21 この水で前もつて表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によつてあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願ひ求めることです。22 キリストは、天に上つて神の右におられます。天使、また権威や勢力は、キリストの支配に服しているのです。

III 福音（マルコ1章9―13節）

9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて、霊が鳩のように御自分に降つて来るのを、御覧になつた。11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。12 それから、「霊」はイエスを荒れ野に送り出した。13 イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

今週の福音の文脈

今週の朗読が含まれる1章1―15節は、マルコ福音書全体の序と見ることが出来る。マルコはマタイやルカとは違って、イエスの系図や誕生物語を書くことなく、洗者ヨハネの証言から始めている。マルコはマラキ3章1節「見よ、わたしは使者を遣わす」に「あなたの前に」を加えることによって、この句を、神がイエスに洗者ヨハネを示しながら語った言葉としている。天上で、神が「あなたの道を準備する」者が現れたことイエスに告げ、救いにとって決定的な時の到来を説いている。そのとき、地上では、洗者ヨハネが罪の赦しを得させるための悔い改めの洗礼を宣べ伝え、人々はそれを受け入れ、彼から洗礼を受ける。彼は彼よりも後に、彼よりも優れた者が来ることを宣言し、「わたしは水で洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」と告げる(1章1―8節)。今日の福音はこれに続くた出来事、つまりイエスの受洗(9―11節)と荒れ野での試み(12―13節)を述べている。

今週の朗読の構成とその解説

- 9 そして 起こった それらの日々に
来た イエスが ガリラヤのナザレから、
そして 彼は洗礼を施された ヨルダンで ヨハネによって。
10 そしてすぐに 水から上がって、
彼は見た 天が 引き裂かれるのを、
そして 霊が 鳩のように 彼に下るのを。
11 そして 声が 起こった 天から、
「あなたは ある 私の愛する子で、
あなたに 私は好意を持った。」
12 そしてすぐに 霊は 彼を 追い出す 荒れ野の中へ。
13 そして 彼はいた 荒野に 四十日
試みられて サタンによって、
そして 彼はいた 獣たちと共に、
そして 天使たちが 仕えていた 彼に。

①【全体の構成】

【9―11節】 洗礼者ヨハネは「洗礼を施していた」が、そのヨハネからイエスは「洗礼を施される」(9節)。この洗礼によって、イエスは民に加わり、彼らを新たな時代へと導き入れる。10節には「彼が見た」ことが描かれる。破線をつけた「上がって」、「引き裂かれる」、「下る」は、動作の継続進行を表す現在分詞形である。イエスは水から上がるにつれて、天が「下る」に引き裂かれ、霊が彼に下りつつあるのを見る。イエスの「上がる」動作と対照的に、霊が天から「下って来る」。このような一連の動きの描写をまとめ上げる表現は「彼は見た」である。この「彼」はもちろんイエスである。人々ではなく、イエスが見たとあるから、10節の霊も、また11節の声も、それを受ける直接の対象はイエスである。10節の「見た」ことに続いて、11節では天からの「声」について語られる。こうして、視覚と聴覚の両方から出来事が描写されている。イエスは「霊」と共にその使命を受け、「声」によってその身分が確認されており、神からの支援が約束される。

イエスの洗礼は、時代の主人公が洗礼者ヨハネからイエスへと交代したことを表している。神からの霊と約束とを受けたイエスは、民の先頭に立って新しい時代へと歩き始める。

【荒れ野での誘惑(12―13節)】 この段落の構成は次のようであろう(このような構成をコ

ンチェントリックと呼ぶ。

a そしてすぐに霊は彼を追い出す荒れ野の中へ。

b そして 彼はいた 荒れ野に 四十日

c 試みられて サタンによって、

b' そして 彼はいた 獣たちと共に、

a' そして 天使たちが 仕えていた 彼に。

四十日の間、獣たちと荒れ野にいたイエスは(bとb')、サタンによって試みられたが(c)、聖霊に守られ、天使たちが仕えていた(aとa')。このような構成から見ても、テーマが「サタンによる試み」にあるといえるだろう。マタイやルカは「悪魔が離れ去った」と書いてイエスの勝利をはっきりさせるが、マルコはそれを書いてはいない。「獣たちと共に」と「天使が仕えていた」が、神の支配が完成するときの(終末論的)祝福を表しているなら、サタンへの勝利が暗示されていることになる。しかし、勝利よりは、試みに重点があると理解したほうがよいかもしれない。

②【構成から使信へ】

【イエスが受けた洗礼(9―11節)】 9節はイエスの洗礼を述べている。イエスはヨハネから「洗礼を施される」ためにガリラヤから彼のもとに来る。ヨハネの洗礼は「罪の赦しを得させるための」洗礼であったが、そうであれば、罪のないイエスが、なぜ、ヨハネから洗礼を受けたのだろう。

マルコは5節で「ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、洗礼を受けた」と述べ、ヨハネの洗礼が民全体に広がっていたことを強調していた。それを思い起こすなら、イエスの洗礼は、それによってこの民の仲間となり、彼らを新たな時代へと招き込むためだと言えるだろう。イエスが受けた洗礼は水による洗礼であるが、この洗礼と共に、洗礼者ヨハネによる準備の時代は幕を閉じ、成就の時代が始まったのである。

また、イエスが語る「洗礼」は、10章38節で「このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」と弟子たちに尋ねたときのように、十字架の死を指すことがある。洗礼者ヨハネからイエスが受けた洗礼は、この十字架上の死をも予示しているかも知れない。イエスはヨハネからの洗礼によって、民の一員となり、彼らを新しい命へと導くが、それは十字架を通る道である。

9節に続く10―11節では、十字架への道を歩み始めるイエスに向けて、神が与える支援が述べられる。まず10節では、水からイエスが「上がって」姿を表したとき、彼が「見た」ものが描かれる。彼が目にしたのは、天が「引き裂かれ」、霊が「下る」ことであった。「天が引き裂かれる」は、神の介入を表すときに使われる表現である。イザヤ63章19節に「あなたの御名で呼ばれない者となつてから、わたしたちは久しい時を過(こ)しています。どうか、天を裂いて降ってください」とあるが、イエスの受洗と共に、神の介入が開始されたのである(エゼ11)。天が開かれると、霊が下ってくる。この霊と共に、神からの使命が与えられ、それを果たす力も付与される。

続く11節では、沈黙していた神がついに「声」を出す。その声はイエスに「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と語りかけて、神からの使命を担うイエスを励ます。この神の言葉はまずはイエスに向けられている。イエスが誰であるかを人々に示すよりも前に、イエス自身に向けられた言葉である。2節に旧約からの引用として、「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させる」とあった。この「あなた」もイエスである。2節の言葉は、天上で、神がイエスに時が到来したと告げる言葉であった。11節では、神に従って地上に降り、洗礼によって民の罪を背負う歩みへと踏み出したイエスに、神は限りな

い愛と支持を語りかけて、彼の自覚を強め、勇気づけている。

このイエスの洗礼に我々があずかるとき、我々の罪は贖われ、聖霊に与り、神との愛の交わりに入れられる。我々の受ける洗礼は、イエスが受けることによって、彼自身の体によって聖別された洗礼である。

【荒野での試み(12-13節)】 洗礼を受けた時にイエスに降った聖霊が(10節)、彼を「荒野へと」追い出す。この「追い出す」という動詞(エクパッロー)は、イエスが悪霊を「追い出す」ときにも使われる動詞であり、「力づくで追い出す」といった強い意味を含んでいる。ここでもその意味を持っているなら、イエスは聖霊に強く促され、追い立てられるように荒野に向かったことになる。ここでの荒野は人間が住む日常の象徴なのであり、そこから悪霊を追放しようとする神の決意の確かさを示すために、イエスを荒野へ「追い出す」といった強い表現を使ったのかもしれない。いずれにせよ、イエスを荒野に引き立てる力は神から来る。

イエスが聖霊によって連れ出された荒野は、イエスを守ろうとする「霊や天使」と、イエスを滅ぼそうとする「サタン」がしのぎを削る場所である。12-13節の構成がこの戦いの激しさを示している(構成を参照)。イエスは人を脅かす野獣の住む荒野で試みにあう。サタンが人を試みるのは、無能さをあばき罪へと誘うためであるが、神がそれを許すのは、それが神への信仰を告白する機会となるからである。神が人を試みるのは、神がその人に能力を知るためではなく、人が信仰を告白できるようにするためである。

イエスは、サタンの試みを受けることによって、神との関わりを確認し、その使命を自覚する。11節で「あなたはわたしの愛する子」と呼びかけられたイエスには果たすべき使命がある。それはサタンに打ち勝ち、神の国(神の支配)の到来を示すことである。

13節の天使たちが「仕えていた」という動詞は、過去の状態の継続を表す未完了過去である。だとすれば、四〇日間も続いたサタンの試みの間、ずっと天使が仕えていたことになる。荒野はサタンが「試みる」場であるが、同時に天使が「仕える」場でもある。荒野は試みる者と仕える者とが共存する場である。現代の「荒野」も同じである。サタンが働くと同時に、我々に仕える者も活動している。だが、我々に仕える者はただ天使だけでない。イエスも我々に仕えている。

③【今週の福音のまとめ】

霊がイエスの上に降ったという記述は、イザ四二一を踏まえている。そこには次のようにある。

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。

わたしが選び、喜び迎える者を。

彼の上にわたしの霊は置かれ…

彼は神から霊を受け、神の救いを待ち望む人々に派遣される人物であるが、やがては民の罪のために「刺し貫かれる」ことよって、民に「平和」と「いやし」を与える「主の僕」である(イザ五三4-5)。イエスは今日の福音が述べる「洗礼」によって、主の僕の任務を自ら引き受ける。イエスは聖霊に支えられ、限らない神の愛に包まれて、我々の罪の赦しとなる十字架への道を歩き始めたのである。

荒野はサタンと天使が共存し、善と悪とが拮抗する場である。その荒野に霊によって「追い出され」、天使によって「仕えられた」イエスは、サタンに勝利することが自らの使命だと知って、人々が住む「荒野」に向かう。この「荒野」には水もパンもあるが、神の言葉と神の業が欠けている。イエスはそこにそれを運ぶ。イエスの「権威ある教え」は人を生かすパンであり、神の国(神の支配)の到来を告げる業は人をうるおす水である。イエスは「荒

れ野」を生きる場とするために来たのである。

④【福音書間の異同】

マルコでは「霊」はイエスを荒れ野に送り出した」とあり、マタイは「イエスは…霊に導かれて荒れ野に行かれた」、ルカは「(イエスは)荒れ野の中を、霊によって引き回され」とある。マタイでは動詞アナゴー(上へ導く)、ルカでは動詞アゴー(導く・引いて行く)、マルコでは動詞エクパツロー(追い出す)が使われている。

四十日間を荒れ野で過ごしたイエスに、悪魔がささやいた誘惑の言葉はマルコには記されていない。しかし、マルコでは「野獣と一緒にいた」と述べられる。この表現はマルコだけに見られる。また、ルカには「天使が仕えていた」という表現はない。マタイでは悪魔が離れ去った後に、「天使たちが来てイエスに仕えた」とあるが、マルコではサタンによる誘惑を受けた四十日の間ずっと、イエスは野獣と一緒におり、天使たちが仕えていたと解釈することも可能である。マルコによれば、荒れ野にはサタンと野獣と天使がおり、イエスはその四十日間とどまったことになる。

⑤【注目すべき単語(エウドケオー・スキゾー・ペイラゾー)】

【好意を持つ(エウドケオー)】 この語は合計21回使われ、パウロ書簡で9回、共観福音書では6回(マタ3、ルカ2、マコ1)、ヘブで3回使われるが、ヨハネ文書では一度も使われていない。もとの意味は「十分に喜んでいる・満足している」であり、用例は次の二つに大別される(なお、以下の用例で括弧をつけた部分がこの語の新共同訳による訳語)。

①まず「同意する・よいと考える・決心する」を意味する。神は「喜ん」で神の国をくださった(ルカ二二28)、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと「お考えになった」(1コリ一22)。パウロはテサロニケの信徒をいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ与えたいと「喜んで願った」し(1テサ二8)、信徒もエルサレムの聖なる者たちを援助することに「喜んで同意した」(ロマ一五28・27)。

②次に「十分に喜んでいる(満足している)」を意味し、③人物を目的語にすれば、「ある人が誰かを十分に喜んでいる、つまり、誰かがある人の心に適う」の意味になる。イエスは神にとって「心に適う」者である(マタ三二、一七)。しかし、荒野でのイスラエルは神の「御心に適わず」、大部分が滅ぼされてしまったし(1コリ十10)、信仰においてひるむような者は神の心に「適わ」ない(ヘブ十38)。④喜びの対象が事物であれば、「大いに喜ぶ、楽しみにする、好む、よいと認める」を意味する。神は焼き尽くす献げ物や罪を贖うためのいけにえを「好まれません」(ヘブ十10)。パウロは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあつても、キリストのために「満足している」が、それは弱いときにこそ強いからである(2コリ一二10)。

以上の用例からも分かるように、この語は神を主語とし、神の喜びを表すことが多く、人間が主語になる用例は七例にすぎない。特に共観福音書では、六例すべてが神を主語とし、そのうち五例はイエスに対する神の喜びを表し、「神がイエスを十分に喜んでいて、つまりイエスは神の心に適っている」の意味である。

イエスに対するこの用例は、旧約聖書のいくつかの箇所を背景としているが(創二二2、詩二七、イザ四二一一4)、最も重要なのは第二イザヤ(イザ四〇―五五章)との関連である。神は救いを地の果てに知らせるために、主の僕を選び、霊を授けて、あらゆる困難を克服する力を与える(イザ四二一一4、マタ二二18―20)。しかし、この僕は「多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った」(イザ五三11)人でもある。イエスの生涯は、第二イザヤが述べた「主の僕」の生涯であった。イエスがその受洗や御変容の際に、「神の心に適う者」と呼ばれるのは、救いを地にもたらすために、十字架へと上って行くからである。

【引き裂く(スキゾー)】 スキゾーは「割る・破く・引き裂く」を意味し、新約聖書では11回使われ、その用例は福音書と使徒言行録に限られている(ルカ3、使・マタ・マコ・ヨハ各2)。二つの用例に大別される。

④文字通りに何らかの事物を「裂く」ことを表す。この場合、まず、⑦網や衣服のように、編まれたり縫われたりした物を「切り裂く」の意味であり、そこには裂いてはならない物を裂く、といったニュアンスがある。イエスを十字架にかけた兵士たちは、イエスの縫い目のない一枚織りの下着を「裂かず」にくじ引きにした(ヨハ一九24)。イエスは、新しい服から布切れを「破って」古い服に継ぎあてすれば、新しい服は「破れるし」、古い服に合わないと言った(ルカ五33)。次に、④天や地や神殿に関して使われ、イエスが誰であり、その死がどのような意味を持つかが明かされる。イエスの受洗のときに、天は「引き裂かれ」(マコ一10)、イエスの死のときには、神殿の幕が「引き裂かれる」(マコ一五38)。いずれの場合も、そのあとには、イエスが誰であることを示す言葉や告白が続いている。

⑤比喩的に使われ、イエスの弟子によってユダヤ人の間に引き起こされた分裂を表す。パウロの発言によって、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は「分裂した」(二三7)。

マルコ福音書では、最初に天が「引き裂かれて」、神がイエスは「神の子」だと述べ、最後では神殿の幕が「引き裂かれて」、異邦人の百人隊長がイエスは「神の子」だと告白している。今週の福音では、神の子イエスを通して働く神の救いの業がいよいよ始められたことが宣言されている。

【試みる(ペイラゾー)】 新約聖書では38回使われるこの動詞は、次の二つの意味に大別される。

⑥他の動詞の不定法を伴い「何かをしようと試みる・努力する」の意味。エルサレムに着いたサウロは弟子の仲間に加わろうと「試みた」(使九20)。

⑦しかし新約聖書では、宗教的な意味で使われることが多い。⑦神やキリストが人間を「試みる」(ヨハ六9)、あるいは「試練を与える」(1コリ十13)ときは、人間にとって神に忠実であることを示す信仰告白の機会である(ヘブ一30)。④逆に、人間が神を「試みる」(1コリ十10)こともあるが、これは神の能力を試し、神が罪を罰する力があるかどうかを知るためであり、荒れ野を旅したイスラエルに顕著な態度である。⑦イエスの敵対者がイエスにそうしたように「不利に働く材料を引き出すために試みる」。ファリサイ派の人々は律法についての議論をしかけてイエスを「試みた」(マコ八12など)。⑤悪魔がそうするように、「罪へと誘惑する」。サタンは荒れ野でイエスを「試みた」(マタ四1など)。

今週の朗読の13節では、イエスがサタンから受ける試みがこの語で表されている。サタンのこの試みをマタイもルカも伝えているが、マルコではイエスが受けた誘惑を具体的に描写しないし、サタンに対する勝利もほのめかされているにすぎない。マルコでの荒れ野は、神的な勢力と悪魔的な勢力とがいまだに共存する場所である。我々が生きる日常も神的な勢力と悪魔的な勢力とが拮抗する場であることを考えるなら、荒れ野は我々の生きる日常の象徴と見ることが出来る。

イエスが荒れ野で試みを受けたのは、同じ「荒れ野」に生きる我々を励まし、慰めるためである。我々の受ける試みも、イエスと共に生きるときに、神への信仰を告白する機会とすることが出来る。